

Bar のようなくつろいだ雰囲気、アートを語り合う場。

ドイツアート Bar

# Creators@Kamogawa

座談会

日独のクリエイターが熱く語る！（日独同時通訳付）



„Von der Realität zum Werk“

Podiumsgespräch (mit Simultanübersetzung Deutsch / Japanisch)

現実を創作に変えるまで

2016年4月2日（土）15:00～

会場：ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川

入場無料・申込不要（カフェ・ミューラーでの飲食は各自ご負担ください）

Samstag, 2. April 2016, 15 Uhr / Goethe-Institut Villa Kamogawa / Eintritt frei

ハネス・マイヤー（建築家）

ティモ・ヘルプスト（美術家）

アンドレアス・シュルツェ（美術家）

パウラ・ロソレン（振付家、ダンサー）

岡田利規（演劇作家、小説家、チェルフィッチュ主宰）

久門剛史（美術家）

小崎哲哉（司会、構成）

Hannes Mayer (Architekt)

Timo Herbst (Bildender Künstler)

Andreas Schulze (Bildender Künstler)

Paula Rosolen (Choreografin, Tänzerin)

Toshiki Okada (Regisseur, Autor, Theatergruppe „chelfitsch“)

Tsuyoshi Hisakado (Bildender Künstler)

Tetsuya Ozaki (Moderator)

GOETHE  
INSTITUT  
VILLA KAMOGAWA

# ドイツアート Bar Creators@Kamogawa

Creators@Kamogawa は、日本とドイツのクリエイターがくつろいだ雰囲気の中でアートを語り合うイベントシリーズです。今回のテーマは、『**現実を創作に変えるまで**』。

「突然のひらめき」という言葉がありますが、芸術作品が無から生じることはありません。突然であったにせよ、ひらめいたアイデアは何らかの体験や記憶に基づいているはず。では創作の源が社会状況に由来する場合、現実が起こった事件や事象は、どのように作品に取り込まれるのでしょうか？ 素材を分析し、加工し、変形するプロセスは、表現者個人によって、あるいは表現のジャンルによって、どのように異なるのでしょうか？

今年3月、最新作『部屋に流れる時間の旅』を KYOTO EXPERIMENT で発表する劇団チェルフイツチュ主宰の岡田利規氏（演劇作家、小説家）と、同作品の音・舞台美術を手がける京都気鋭の美術家・久門剛史氏をゲストに迎え、1月中旬～4月中旬までヴィラ鴨川で滞在中のドイツ人芸術家4人が、アートジャーナリスト小崎哲哉氏の司会のもと、意見を交わします。

座談会の後は、館内のドイツカフェ『カフェ・ミュラー』にて、ドイツビールやおつまみを片手に交流をお楽しみください。交流会では、滞在中のドイツ人芸術家の作品も、モニターでご覧いただけます。



## ハネス・マイヤー Hannes Mayer (建築家)

1981年生まれ。コト布斯、ロンドン等で建築を学び、専門誌での発表や著書多数。現在、ウィーン造形美術アカデミー教授。キュレーター、地衣類研究者、音楽家の顔も持つ。2007年以降フランク・ロイド・ライトの空間概念の今日化に取り組む。これまでの作品はチューリヒ建築フォーラムや第12回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展等で紹介された。京都滞在中は、デジタルプロセスをベースとした技術的・理論的な仕事と日本の竹編み細工を関連付け作品化する予定。



## ティモ・ヘルプスト Timo Herbst (美術家)

1982年生まれ。ライブツィヒ、プレーメン等で美術を学んだ。身体運動のコレオグラフィーと空間性を、ビデオやスケッチ等を通して考察する。作品は、ミュンヘンのハウス・デア・クンストやライブツィヒ造形美術館をはじめドイツ国内外の数々の展覧会で紹介された。京都滞在中は、日本の都市空間における運動リズムや活動を調査し、身体表現に翻訳してフィルムや大判和紙上に視覚化した作品を創る予定。公式サイト [www.timoherbst.org](http://www.timoherbst.org)



## アンドレアス・シュルツェ Andreas Schulze (美術家)

1965年生まれ。ライブツィヒで美術を学んだ後、メディア社会に過剰に溢れる画像や情報、秩序の構造、プレゼン方法等をテーマに創作を行う。作品はヨーロッパとアメリカの主要な展覧会で紹介されている。京都滞在中は、京都の文化遺産がいかに表現・認知されているかを調査し、デジタル技術のもたらした変化の中で、大衆観光と神社仏閣の神聖さ、自撮り遊びと宗教的敬虔さは共存しうるのか等を考察して、画像とテキストからなるコラージュを創作予定。



## パウラ・ロソレン Paula Rosolen (振付家、ダンサー)

1983年生まれ。ダンス、ドキュメンタリー演劇、オーラルストーリーの関係性をテーマに創作。エッセンのパクト・ツォルフェライン、ハンブルクのカンパナーゲルをはじめ、ポーランド、アルゼンチンなど各地の重要な劇場やフェスティバルで作品を上演。2014年パリの国際コンクール「ダンス・エラジー」で優勝。京都滞在中は、文楽人形のなめらかな動きや感情表現、その演技的知識を研究して、自身の新作に役立てる予定。公式サイト [www.paularosolen.com](http://www.paularosolen.com)



## 岡田 利規 Toshiki Okada (演劇作家、小説家、チェルフイツチュ主宰)

1973年横浜生まれ。熊本在住。独特な言葉と身体の関係性を用いた手法が高く評価され、2007年に海外進出を果たして以降、世界70都市以上で作品を上演。主な受賞歴に、『三月の5日間』岸田國士戯曲賞(2005年)、『わたしたちに許された特別な時間の終わり』大江健三郎賞(2007年)がある。2016年よりドイツ有数の公立劇場ミュンヘン・カンマーシュピールのレパートリー作品を3シーズンにわたって演出する。公式サイト <http://chelfitsch.net>



## 久門 剛史 Tsuyoshi Hisakado (美術家)

京都生まれ。京都市立芸術大学大学院修了。様々な現象や歴史を採取し、音や光、立体を用いて個々の記憶や物語と再会させる劇場的空間を創出している。近年の主な展覧会に「日産アートアワード2015」(BankART Studio NYK/横浜)、「still moving」(元・崇仁小学校/京都/2015)、「Quantize」(オオタファインアーツ/シンガポール/2015)など。平成27年度京都市芸術文化特別奨励賞。2016年、VOCA賞受賞。公式サイト <http://tsuyoshihisakado.com>



## 小崎 哲哉 Tetsuya Ozaki (司会、構成)

1955年東京生まれ。ウェブマガジン『REALTOKYO』『REALKYOTO』発行人兼編集長。写真集『百年の愚行』などを企画編集し、現代アート雑誌『ART iT』を創刊した。京都造形芸術大学大学院学術研究センター客員研究員、同大学院、愛知県立芸術大学講師。あいちトリエンナーレ2013のパフォーミングアーツ統括プロデューサーを担当した。4月29日から、京都造形芸術大学ギャラリー・オーブで『百年の愚行展』を開催予定。

### 交通のご案内

京阪電車 出町柳駅より 南へ徒歩8分  
京阪電車 神宮丸太町駅より 北へ徒歩6分



### 主催・お問い合わせ

Goethe-Institut Villa Kamogawa  
京都市左京区吉田河原町 19-3  
(川端通り荒神橋上る)  
TEL: 075-761-2188 (内線 31#)  
info@villa-kamogawa.goethe.org  
www.goethe.de/villa-kamogawa



館内のドイツカフェ『カフェ・ミュラー』も、ドイツビールや軽食などをご用意して、皆様のお越しをお待ちしています。

